
— — — — —

高齢ペット安心ガイド

これから安心して暮らすために



うちの子と、これからも

もくじ

はじめに	3
1. 体の変化とケアの準備	3
1-1 かかりつけ医の情報	3
1-2 持病、服薬の記録	4
1-3 救急医療について	4
1-4 体調変化の記録	5
1-5 介護の選択肢	6
2. 生活と介護の工夫	7
2-1 介護用品の選び方	7
2-2 加齢による変化に備えたフード選び	8
2-3 排泄ケア	9
2-4 移動補助	10
2-5 外部サービス	12
3. 緊急時への準備と対応	13
3-1 緊急時を想定しておく	13
3-2 災害での避難生活	14
3-3 飼い主の病気・事故での長期不在	15
3-4 飼い主が先に亡くなった場合の備え	16
4. 最期を迎えるにあたって	18
4-1 最期の医療方針	18
4-2 最期が近づいたときに見られる変化	19
4-3 医療の選択肢	20
5. お別れ	22
5-1 息を引き取った後	22

5-2 自治体の引き取りサービス	23
5-3 民間のペット火葬サービス	25
5-4 供養、埋葬の選択肢	27
6. ペットロスについて	28
7. チェックリスト	30
8. 犬種、猫種による加齢における注意点	31
犬	31
・ トイプードル	31
・ チワワ	32
・ ミニチュアダックスフンド	34
・ 柴犬	36
・ ミニチュアシュナウザー	37
・ コーギー	38
・ フレンチブルドッグ／パグ	39
・ キャバリア	40
・ ゴールデン・レトリバー／ラブラドル	41
猫	42
・ スコティッシュフォールド	42
・ メインクーン	43
・ ラグドール	44
・ ペルシャ／エキゾチックショートヘア	45
・ シャム	46
・ シニア猫全般で見逃しやすい変化	46
おわりに	48
筆者について	48

はじめに

本書は、ペットと暮らす中で起こりうる医療・介護・災害・最期・葬送・供養について、どのような選択肢があるのかを整理したペット終活のガイド誌です。

特定の方法を勧めるものではなく、必要なときに確認できるよう、一般的な情報をまとめています。

1. 体の変化とケアの準備

1-1 かかりつけ医の情報

かかりつけ医については、家族で共有しておくことをお勧めしています。

- ① 病院名
- ② 住所
- ③ 電話番号
- ④ 診療時間
- ⑤ 夜間対応
- ⑥ 緊急連絡先
- ⑦ 担当医名
- ⑧ 担当医の特徴

1-2 持病、服薬の記録

高齢期になると薬が増える場合がありますので、記録しておくのと別の病院などにかかる場合などに説明しやすいです。

- ① 薬名
- ② 用量
- ③ 投薬時間
- ④ 副作用の有無
- ⑤ 食事との関係
- ⑥ かかりつけ医からの指示のメモ

1-3 救急医療について

突然の病気やケガの際は、まずかかりつけ医に連絡し、連絡がつかない場合は夜間救急や救命救急の動物病院をご利用ください。

救急救命病院はまず電話で問い合わせをするようにしてください。

【夜間や救急救命病院については、筆者の基準で評価した一覧をサイトで公開しています】

掲載病院は少なくとも 0 時までは開いていると確認できた病院としております。

■ 夜間救急の一覧はこちら

(筆者の評価基準に基づき掲載しています)

<https://petanshin.com/hospital/>



1-4 体調変化の記録

体調の変化を記録しておくことで急な変化の際に役に立つ場合があります。

- ・食欲（食べた／残した）
- ・排泄（普段通り／少ない／下痢）
- ・元気（歩き方・反応）
- ・睡眠（よく寝ている／落ち着かない）

毎日続けるのは難しいと思いますので、変化があったときだけ残すのも1つです。

目に見える変化があれば、写真や動画で残すと正確に伝えられます。歩き方、呼吸の様子、皮膚や腫れの変化、食事の様子などで変化がある場合は日付と共に残しておくとも役立つ場合があります。

1-5 介護の選択肢

ペットが高齢になり、介護が必要になったときには、いくつかの選択肢があります。ここではどのような仕組みが存在するのかを簡単にまとめています。

① 自宅での介護（在宅ケア）

生活環境を整えながら、動物病院の指示に基づいて自宅でケアを行う方法です。

② 通院しながらの介護

定期的に動物病院で処置を受けつつ、自宅でのケアと組み合わせる方法です。

③ 往診（訪問診療）

動物病院が自宅に来て診療を行う仕組みで、移動が難しい場合に利用されます。

④ 動物介護施設（老犬ホーム等）

長期預かり型の介護施設で、24 時間体制のケアが受けられる仕組みです。

⑤ 緩和ケア（ホスピス）

延命よりも、苦痛を減らしながら穏やかに過ごすことを目的としたケアです。

どの選択肢が適しているかは、ペットの状態や生活環境によって大きく異なります。「こういう仕組みがある」という全体像だけを知っておいて頂ければと思います。

2. 生活と介護の工夫

2-1 介護用品の選び方

ペットが高齢になると、日々の生活を少しでも楽にするために、介護用品を使う場面が増えてきます。ここでは選ぶときのポイントをまとめています。

① その子の「できること、できないこと」を基準にする

介護用品は、年齢ではなく“今どんな動きが難しくなっているか”で選ぶと失敗しません。

- ・立ち上がりがゆっくりになった
- ・足が滑りやすくなった
- ・食事の姿勢がつかう
- ・排泄の失敗が増えてきた

② まずは「環境を整える」ものから

いきなり多くの用品を揃える必要はありません。最初は生活環境を安全にするものから始めると負担が少ないです。

- ・滑り止めマット
- ・段差をなくす工夫
- ・ベッドの見直し（沈み込みすぎないもの）

これだけでも、転倒防止や関節の負担軽減につながります。

③ 介護の負担を減らすための用品

飼い主さんの負担を軽くすることは、結果的にペットの安心にもつながります。

- ・持ち上げ補助ハーネス

- ・乾きやすい素材か
- ・滑りにくいかな

「無理なく続けられるか」を基準に選ぶのがポイント。

④ サイズ・素材・お手入れのしやすさを確認

介護用品は毎日使うものが多いため、洗いやすさ、乾きやすさ、耐久性がとても大切です。

- ・洗濯できるか
- ・乾きやすい素材か
- ・滑りにくいかな

使い続けられるかどうか、何より重要です。

⑤ いきなり完璧を目指さなくていい

介護用品は、「必要になったら少しずつ足していく」くらいがちょうど良いです。ペットの状態は変化するため、その都度、必要なものも変わっていきます。

2-2 加齢による変化に備えたフード選び

ペットが高齢になると、食欲や食べ方に少しずつ変化が出てくることがあります。ここでは食事の変化に合わせた“フードの選び方”のポイントをまとめています。

① 食べやすさを優先する

- ・粒の大きさ
- ・柔らかさ
- ・香りの強さ

② 体調の変化に合わせて調整する

- ・体重が減ってきた

- ・水を飲む量が増えた
- ・腎臓や心臓に負担が出てきた

こうした変化がある場合は、かかりつけ医と相談しながらフードの種類を見直すことがあります。

③ 食欲が落ちたときの工夫

- ・少量でも栄養がとれるタイプを選ぶ
- ・温めて香りを立たせる
- ・水分を加えて飲み込みやすくする

食べる量が減ってきたときは、「どう食べてもらうか」を考えることが大切です。

④ 急に大きく変えない

フードを切り替えるときは、急に変わるとお腹を壊すことがあるため、少しずつ混ぜながら移行するのが安心です。

⑤ 「その子のペース」を大切にする

- ・1回の量が減る
- ・食べるスピードがゆっくりになる
- ・何回かに分けて食べたがる

こうした変化は自然なこと。その子のペースに合わせてあげることが、安心につながります。

2-3 排泄ケア

高齢になると、排泄のリズムが変化したり、間に合わなくなることがあります。ここでは、排泄ケア用品を選ぶときの知っておくと役立つポイントをまとめています。

① シーツは「吸収力」と「広さ」

- ・吸収量が多いもの
- ・ベッドや生活スペースを広くカバーできるサイズ

“広く・しっかり吸う” が基本。

② オムツは「フィット感」

- ・体に合うサイズ
- ・ずれにくい形
- ・肌に優しい素材

合わないと漏れやすく、ストレスにもなるため、最初は少量購入して試すと安心。

③ 交換しやすい環境づくり

- ・シーツやオムツをすぐ取れる場所に置く
- ・夜間も交換しやすいように準備しておく

飼い主さんの負担が減ると、結果的にペットも落ち着いて過ごせる。

④ 完璧を目指さなくていい

排泄の変化は自然なこと。その子が快適に過ごせるように、少しずつ工夫することが大切です。

2-4 移動補助

高齢になると、足腰が弱くなり、立ち上がりや歩行が難しくなることがあります。特に大型犬は体重があるため、移動のサポートが必要になる場面が増えてきます。ここでは、移動補助用品を選ぶときの基本のポイントをまとめています。

① ハーネスは「持ち上げやすさ」と「体への負担」で選ぶ

- ・前足、後ろ足、全身タイプなど、弱っている部分に合わせる
- ・飼い主が持ち上げやすい構造

- ・体にフィットして擦れにくい素材

② カートは「安定性」と「乗り降りのしやすさ」

- ・揺れにくい構造
- ・低い位置で乗り降りしやすい
- ・体を支えるクッション性

散歩が難しくなっても、外の空気をを感じる時間は高齢期の大切な刺激になります。

③ 家の中の移動もサポートする

- ・滑り止めマット
- ・段差をなくす工夫
- ・ベッドの位置を見直す

「歩きやすい環境づくり」も移動補助の一部です。

④ 大型犬は“抱える”ことを前提にしない

大型犬は、

- ・立ち上がりの補助
- ・排泄時の支え
- ・車への乗り降りなど、抱き上げずにサポートできる道具 が必要になる。

ハーネスやスロープを使うことで、飼い主の負担も減り、ペットも安心して動ける。

⑤ 無理に歩かせない

高齢期は、「歩かせる」より「安全に移動できるようにする」ことが大切。その子の体力に合わせて、無理のない範囲でサポートする。

2-5 外部サービス

訪問介護について

① 自宅にスタッフが来てサポートする仕組み

- ・食事や水分補助
- ・体の清拭や簡単なケア
- ・見守り
- ・通院の付き添い（サービスによる）

「移動が難しい」「家で過ごさせたい」という場合に役立つ。

② 必要なときだけ利用できる

- ・仕事で家を空ける日
- ・体調が悪くて介護が難しい日
- ・介護負担が一時的に大きいとき

状況に合わせて柔軟に利用できる。

③ 家族の負担を減らすためのサービス

訪問介護は、家族の介護負担を軽くすることを目的とした仕組み。家族が無理なく続けられる環境をつくることで、結果的にペットも安心して過ごせます。

④ 医療行為は行わない

- ・体調の観察
- ・日常ケア
- ・通院サポート

あくまで「生活のサポート」が中心。

⑤ 事前に“できること、できないこと”を確認する

訪問介護は事業者によって内容が異なるため、事前に対応範囲を確認しておくで安心。

- ・どこまでケアしてもらえるか
- ・緊急時の対応
- ・料金体系
- ・利用時間帯

確認しておくことにより必要な場面でスムーズに利用できる。

3. 緊急時への準備と対応

3-1 緊急時を想定しておく

① 災害で避難生活が必要になったとき

地震・台風・水害などで自宅にいられなくなる場合、
ペットと一緒に避難するための準備が必要になります。

② 飼い主の病気や事故で長期不在になるとき

入院や療養などで、数日～数週間家を空ける場合、
ペットの世話を誰が担うかを決めておく必要があります。

③ 飼い主が先に亡くなった場合の備え

高齢の飼い主が増えている現在では、
万が一のときにペットを託せる人や連絡先を決めておくことも、“緊急時の準備”のひとつです。

3-2 災害での避難生活

① 避難所でのペットの扱いを確認しておく

災害時は「飼い主がペットと一緒に避難所まで避難する（同行避難）」が全国で推奨されています。

ただし、避難所の中で人と同じスペースに入れるわけではなく、多くの自治体では ペット専用の飼育スペースが設けられます。

受け入れ方針や場所は自治体ごとに異なるため、お住まいの市区町村の防災担当や動物愛護担当に事前に確認しておくといざという時安心です。

② ペットの避難用品（チェックリスト）

- ・フード、水（数日分）
- ・薬、サプリ
- ・トイレ用品
- ・タオル・ブランケット
- ・首輪・リード・ハーネス
- ・写真（迷子対策）

高齢ペットは環境の変化に弱いため、普段使っているものを入れておくと安心です。

③ 迷子対策をしておく

災害時は、驚いて逃げてしまうケースもあります。

- ・首輪・迷子札
- ・マイクロチップの登録情報の確認
- ・ペットの写真をスマホに保存

念のため、「もし離れてしまったら」という可能性も考えておいてください。

④ 生活環境の変化に配慮する

- ・体温調整に気をつける
- ・食事や排泄のリズムをできる範囲で維持する

高齢ペットは体調を崩しやすいため、可能な範囲で普段の生活に近づけることを意識してください。

3-3 飼い主の病気・事故での長期不在

入院や療養などで、急に家を空けることになった場合、高齢のペットは日常のケアが途切れると負担が大きくなります。

① 預け先をどうするか

急な入院でも、誰に頼むかを考えておくと安心です。

- ・家族、親族
- ・信頼できる友人
- ・かかりつけ動物病院の預かり
- ・訪問型のペットシッター

② 預け先に伝えるべきこと（チェックリスト）

- ・食事の量、時間
- ・薬の種類と与え方
- ・排泄のリズム
- ・好き嫌い・注意点
- ・かかりつけ動物病院の情報
- ・緊急連絡先

③ できる範囲での備え

日頃から無理なくできる範囲で、次のような備えがあると安心です。

- ・フードや薬を少し多めにストック
- ・ペットの生活情報をメモしておく
- ・預け先候補に「もしもの時はお願い」と一言伝えておく

3-4 飼い主が先に亡くなった場合の備え

高齢の飼い主にとって、

「自分が先に亡くなったら、この子はどうなるのか」

という不安は、とても現実的なものです。

日本では、動物愛護管理法により

“終生飼養（命が尽きるまで適切に飼うこと）”が飼い主の責務とされています。

また、東京都・神奈川県など多くの自治体も、飼い主が亡くなる場合の備えを事前にしておくことを公式に呼びかけています。

ここでは、ペットが安心して暮らし続けられるように、準備しておきたい内容をまとめています。

① 引き取り先を決めておく

最も重要なのは、ペットを託せる人を決めておくことです。

- ・家族、親族
- ・信頼できる友人
- ・ペットを迎え入れる意思のある第三者
- ・必要に応じて「ペット信託」などの制度も選択肢

「もしものときはお願い」と事前に話しておくだけでも安心につながります。

② 緊急連絡先を明記しておく

突然の事態でも、周囲が迷わず動けるようにします。

- ・引き取り先の連絡先
- ・家族・親族
- ・かかりつけ動物病院
- ・ペット保険の連絡先

これらを 紙・スマホ・冷蔵庫のメモなど、見える形で残しておく と 確 実 です。

③ ペットの生活情報をまとめておく

引き取り先が困らないよう、日常の情報を整理しておきます。

- ・食事の量、時間
- ・薬の種類と与え方
- ・排泄のリズム
- ・性格・好き嫌い
- ・持病・治療歴
- ・かかりつけ動物病院の情報

これは 「ペットの生活ノート」 として 1 枚にまとめておく と 便 利 。

④ 遺言書、エンディングノートに記載しておく

法的な裏付けを持たせたい場合は、

遺言書に「ペットの引き取り先」を明記することもできます。

より気軽な方法として、エンディングノートにペットのことを書く の も 有 効 です。

- ・誰に託すか
- ・ペットの生活情報
- ・ペットに関する希望（最期の看取り、葬送など）

書いておくことで、家族や友人が迷わず対応できます。

4. 最期を迎えるにあたって

4-1 最期の医療方針

高齢のペットと暮らしていると、
いつか「最期の時間」を意識しなければならない場面が訪れます。
そのときに直面する選択には、延命治療、緩和ケア、見取りの場所など、いくつかの分岐があります。

まずお伝えしたいのは、
どの選択にも“正解”はないということです。

延命治療を続けるかどうか、
どこで最期の時間を過ごすかという判断は、
ペットの状態や家族の状況によって大きく異なります。

大切なのは、
「この子にとって、どんな過ごし方がいちばん安心で、穏やかで、幸せだろうか」
という視点です。

医療的なサポートがその子の安心につながる場合もあれば、
最期の時間を自宅で家族と過ごすことが、
その子にとって何よりの安らぎになることもあります。

どちらが正しいということではなく、
その子がどんな環境で落ち着いて過ごせるのかを考えておくこと。
それが、いざというときの選択を少し優しくしてくれます。

4-2 最期が近づいたときに見られる変化

最期の時間が近づくと、これまでの生活リズムや体の状態に、少しずつ変化が見られることがあります。

ここで紹介するのは、あくまで「よく見られる変化」であり、すべての子に当てはまるわけではありません。

① 食事量・水分量の変化

- ・食べる量が減る
- ・好きなものでも口にしない
- ・水を飲む量が少なくなる

体の機能がゆっくりと弱まっていく過程で、
食事や水分を受け付けにくくなる場合があります。

② 眠っている時間が増える

- ・ほとんどの時間を寝て過ごす
- ・呼びかけに対する反応がゆっくりになる

体力を温存するため、睡眠時間が長くなる場合があります。

③ 反応がゆっくりになる

- ・名前を呼んでも反応が弱い
- ・周囲への興味が薄くなる

意識がぼんやりする時間が増える場合があります。

④ 呼吸の変化

- ・呼吸が浅くなる

- ・速くなったりゆっくりになったりする
- ・間隔が不規則になる

体の機能が変化することで、呼吸のリズムが変わることがあります。

⑤ 体温の変化

- ・手足が冷たくなる
- ・体温が下がりやすくなる

血液の循環が弱まることで、体温が安定しにくくなります。

⑥ 立ち上がりにくくなる

- ・歩く距離が短くなる
- ・立ち上がるのに時間がかかる
- ・ふらつくことが増える

筋力の低下や体力の消耗によるものです。

⑦ 排泄の変化

- ・トイレまで行けなくなる
- ・排泄の間隔が変わる
- ・失禁が増える

体のコントロールが難しくなることで起こる変化です。

どのような変化が見られるかは個体差が大きいため、
気になる点があれば、かかりつけ医に相談しながら見守ることが大切です。

4-3 医療の選択肢

① 延命治療

病気の進行を遅らせたり、生命を維持するための治療を続ける選択です。

- ・点滴や投薬の継続
- ・入院による集中的なケア
- ・呼吸や循環をサポートする医療

治療を続けることで、過ごせる時間が延びる場合があります。

② 緩和ケア

病気を治すことよりも、

痛みや不安を和らげ、穏やかに過ごせるようにするケア です。

- ・痛みのコントロール
- ・呼吸のしやすさの確保
- ・食事・排泄のサポート
- ・不安を減らす環境づくり

延命治療と併用されることもあります。

③ 見取りの場所を選ぶ

最期の時間をどこで過ごすかを選ぶことも、医療方針の一部です。

- ・自宅
- ・動物病院
- ・訪問診療、在宅医療の利用

どの場所がその子にとって落ち着けるか、

家族が寄り添いやすいかによって選択をすることになります。

5. お別れ

5-1 息を引き取った後

大切な家族が息を引き取った直後は、気持ちが追いつかず、何をすればよいのか判断が難しいことがあります。

まずは、別れの時間をゆっくりと過ごして構いません。

① 体を整える（安置）

亡くなった後は、体にいくつかの変化が起こることがあります。目が開いたままであったり、口、鼻から体液が出ることもあります。これは自然な現象です。

次のような形で体を整えることがあります。

- ・目をそっと閉じる
- ・体をやさしく拭く（濡れタオルで軽く）
- ・姿勢を整える（無理に伸ばさない）
- ・涼しい場所に安置する（保冷剤をタオルで包んで置く）

※死後硬直は2～3時間以内に始まる場合があります。

② 時間を一緒に過ごす

過ごし方はそれぞれです。保冷剤などで適切に冷やせば、気温が低い季節は2～3日安置できます。逆に暖かい季節は、1～2日で腐敗が進んでしまう場合があります。

- ・毛並みを整える
- ・写真を撮る
- ・家族で順番に触れ合う
- ・静かにそばにいる

③ 犬の場合の行政手続き

犬の場合は、自治体への「死亡届」が必要です。手続きは急ぐ必要はなく、落ち着いてからで大丈夫です。

猫やその他の動物は行政手続きはありません。

5-2 自治体の引き取りサービス

ほとんどの自治体では、亡くなった動物の引き取りを行っています（有料）。

利用する場合は、自治体の担当部署へ連絡し、日時を予約する形が一般的です。

事前に問い合わせておくとう安心ですが、その時を迎えてから連絡しても問題ありません。

■自治体の引き取りは「一般廃棄物としての取り扱い」が基本
ほとんどの自治体では、ペットの遺体は「一般廃棄物と同じ扱い」で処理されます。

そのため、

- ・他の廃棄物と一緒に焼却されることが多い
- ・遺骨の返却は行われない
- ・個別火葬には対応していない
- ・大型犬でも引き取り可能（体重制限はほとんどない）

という特徴があります。

■多くの自治体は「持ち込み」が必要
自治体の引き取りといっても、

自宅まで来てくれるわけではありません。

ほとんどの自治体では、

- ・クリーンセンター
- ・環境事業所
- ・動物管理センター

などへ自分もしくは家族が連れていく必要があります。

■ 一部の自治体では例外的に「動物専用炉」や「個別火葬」に対応
全国的には少数ですが、自治体によっては

動物専用の火葬炉を設置し、

個別火葬や返骨に対応しているところもあります。

例として、

- ・東京都台東区
- ・東京都中野区
- ・神奈川県横浜市
- ・千葉県市川市

などが挙げられます。

ただし、

- ・利用できるのはその自治体の住民のみ
- ・予約枠が限られている
- ・返骨は条件付き

といった制約があります。

■ 自治体サービスの特徴（まとめ）

- ・費用は比較的安い

- ・基本は一般廃棄物としての焼却
- ・返骨できないことが多い
- ・サービス内容は自治体ごとに異なる
- ・個別火葬・返骨対応は一部自治体のみ
- ・ほとんどの自治体は持ち込みが必要

自治体サービスは、

「費用を抑えたい」「返骨にこだわらない」場合には選択肢になります
が、“どのように送りたいか”によっては選択肢が限られることがあります。

5-3 民間のペット火葬サービス

自治体サービスとは別に、民間のペット火葬業者によるサービスも広く利用されています。

■ 民間火葬サービスの特徴

民間業者は、多くの自治体と異なり「火葬サービスとしての取り扱い」を行います。

一般的には次のような選択肢があります。

- ・個別火葬（返骨あり）
- ・立ち会い火葬
- ・合同火葬（返骨なし）
- ・自宅訪問の移動火葬車
- ・霊園での火葬・納骨
- ・大型犬対応の有無
- ・固定炉の有無

自治体と比べると、「どのように送りたいか」に合わせて選べる幅が広いのが特徴です。

■ 自治体サービスとの主な違い

	自治体（例外有り）	民間業者
取り扱い	一般廃棄物としての焼却	火葬サービスとしての取り扱い
返骨	ほぼ不可	返骨可能（個別火葬）
火葬方法	他の廃棄物と一緒に焼却	個別・立ち会い・合同など選択可能
大型犬	引き取り可能	業者により対応が異なる
設備	専用炉は一部自治体のみ	固定炉・移動炉など業者により異なる
費用	比較的安い	サービス内容により幅がある
持ち込み	多くは持ち込み	自宅訪問も可能

自治体は 費用が安い一方で、送り方を選ぶことができない という特徴があります。

民間業者は 選択肢が多い一方で、

設備や品質に差があるため、事前の確認が必要になります。

【民間火葬業者については、筆者の基準で評価した一覧をサイトで公開しています】

民間火葬業者は、設備・対応範囲・返骨方法・大型犬対応など、業者ごとに違いがあります。

■ 民間火葬業者の一覧はこちら

（筆者の評価基準に基づき掲載しています）

<https://petanshin.com/cremation/>



5-4 供養、埋葬の選択肢

近年ではペットの供養をおこなう方も増えています。ここでは主にどんなものがあるのかご紹介致します。

① お別れ式（セレモニー）

ペット霊園や自宅で行う、形式的なお別れの儀式。

- ・自宅セレモニー：個人や家族などだけで写真や花を飾り、静かに見送る

- ・ホール式セレモニー：霊園の式場で司会進行や読経などをおこなう式典に近い形式

- ・メモリアル演出：好きだったおもちゃ・おやつ・音楽などを添える

② 供養祭・法要（合同・個別）

寺院や霊園が定期的に行う供養行事。

- ・合同供養祭：春、秋のお彼岸などに複数のペットをまとめて供養

- ・個別法要：個人や家族などで読経や焼香を行う

③ 納骨・埋葬のスタイル

火葬後の遺骨をどこに安置するか

- ・個別納骨堂

屋内のロッカー型スペースに骨壺を安置。

特徴：天候に左右されずお参りしやすい。

- ・合同墓（合祀墓）

他のペットと一緒に埋葬する共同墓。

特徴：費用が抑えられ、管理も霊園側が行う。

- ・樹木葬

樹木の下に埋葬する自然葬。

特徴：自然に還るイメージ

④ 自宅供養（手元供養）

遺骨や遺灰を自宅で保管し、日常の中で供養する方法。

- ・ミニ骨壺
- ・ペット用仏壇・メモリアルステージ
- ・遺骨アクセサリー（ペンダント・キーホルダー）
- ・遺毛・遺爪を保管するメモリアルケース

⑤ 散骨（自然葬）

遺灰を自然に還す供養方法。

- ・海洋散骨（乗船散骨・代行散骨）
- ・山林散骨
- ・自宅庭への散骨（自治体のルールに注意）

6. ペットロスについて

① ペットロスは自然な感情

ペットロスは飼い主に起こるごく自然な感情です。ペットを愛しているからこそ、その喪失によって、心や身体に変化がみられるのは当然の現象といえます。

- ・涙が止まらない
- ・食欲が出ない
- ・無気力
- ・喪失感

こういった症状が表れても過剰に心配したり、早期回復を目指す必要はありません。

② 周囲との違いがあることは当然

家族の中でも、悲しみの表れ方は異なるものです。

- ・すぐに片づけたい人
- ・しばらくそのままにしておきたい人
- ・話したい人
- ・話したくない人

考え方、感じ方が異なるのは自然なことなのです。

③ ペットが教えてくれたこと

ペットとの生活がもたらしてくれるものは、単なる共生ではありません。お互いがお互いを必要とし、癒しと幸せな時間をもたらししてくれる存在であり、生きる上でのエネルギー源になっていたりします。そんなペットの喪失で、ペットロスとなるのは当然のことなのです。

④ 命のバトンタッチ

悲しみのあとに、「私にはやっぱりペットが必要」「またペットを飼いたい」といった感情が自然と沸き起こることもあります。それは命のバトンタッチともいえ、亡くなったペットが飼い主にとってちょうど良いタイミングで新しく連れてきてくれたりするのです。

7. チェックリスト

すべてを事前に確認しておく必要はありません。できることから確認していきましょう。

調べた情報が気付かないうちに変更されていることがあることも理解しておきましょう。

☐ かかりつけ医の情報を家族で共有する

☐ 持病や服薬内容を記録する

☐ 近隣の夜間救急（動物病院）の連絡先を把握する

☐ 災害時の避難場所と移動手段を確認する

☐ 避難時に必要な持ち物を確認する

☐ 飼い主が入院・不在になった場合の預け先を考える

☐ 利用可能な火葬場（自治体・民間）の情報を把握する

☐ 希望する埋葬方法（納骨・合祀・自宅供養・散骨など）を検討する

8. 犬種、猫種による加齢における注意点

- ① この犬種・猫種で特に気をつけたいこと
- ② こんな変化に気づいたら
- ③ シニア期の暮らしでできること
- ④ 動物病院で相談・確認しておきたいこと

※ここで紹介する内容は、その犬種・猫種が必ずその病気になるという意味ではありません。個体差がありますので、日頃の変化を知るための参考としてご覧ください。

犬

・トイプードル

- ①膝：膝蓋骨脱臼のリスクが高い

歯：歯周病になりやすい

目：進行性網膜萎縮など眼の疾患が比較的多い犬種

- ②膝：歩いている途中で急に後ろ足を上げる、スキップするように歩く、以前より段差やジャンプを嫌がるといった変化は、ひざなどに違和感があるサインかもしれません。

歯：口臭が強くなった、硬いものを食べにくそうにする、片側だけで噛む、口元を触られるのを嫌がるといった変化にも注意しましょう。
目：暗い場所で動きにくそうにする、物にぶつかる、階段をためらうなど、見え方の変化を疑う行動も見逃さないようにしましょう。

③膝：フローリングなど滑りやすい床にはマットを敷き、ソファなど高い場所からの飛び降りをできるだけ減らします。太りすぎは足腰への負担になるため、適正な体重を保つことも大切です。

歯：歯については、できる範囲で日頃から口の中を見る習慣を。歯磨きなどのデンタルケアも続けていきましょう。

目：家具の配置を大きく変えない、夜間は足元を明るくするなど、視力が低下してきた場合にも暮らしやすい環境を整えられます。

④健康診断の際には、ひざの状態、歯や歯ぐきの状態、目の変化について相談してみてもよいでしょう。

特に歩き方が以前と違う、口臭や食べ方が変わった、見えにくそうな様子がある場合は、「年齢のせいかな」と決めつけず、一度獣医師に伝えてみましょう。

・チワワ

①心臓：心臓の弁の疾患のリスクが比較的高い。加齢との関連性も指摘されている。

膝：膝蓋骨脱臼のリスクが高い

歯：歯周病になりやすい

②心臓：散歩で疲れやすくなった、運動を嫌がる、咳が出る、呼吸が速い・苦しそう、といった変化には注意します。特にシニア期では「年を取って体力が落ちただけ」と考えず、変化を見ておくことが重要です。

膝：歩いている途中で急に後ろ足を上げる、スキップするように歩く、以前より段差やジャンプを嫌がるといった変化は、ひざなどに違和感があるサインかもしれません。

歯：口臭が強くなった、硬いものを食べにくそうにする、片側だけで噛む、口元を触られるのを嫌がるといった変化にも注意しましょう。

③心臓：散歩中の疲れ方や咳、呼吸の様子など、普段の状態を知っておくことが大切です。暑さや過度な運動を避け、その日の体調に合わせて運動量を調整します。

膝：フローリングなど滑りやすい床にはマットを敷き、ソファなど高い場所からの飛び降りのできるだけ減らします。太りすぎは足腰への負担になるため、適正な体重を保つことも大切です。

歯：歯については、できる範囲で日頃から口の中を見る習慣を。歯磨きなどのデンタルケアも続けていきましょう。

④健康診断の際には、心音や心臓の状態、ひざ、歯・歯ぐきの状態について相談してみてもよいでしょう。

特に、咳や呼吸の変化、疲れやすくなった、歩き方がおかしい、口臭や食べ方が変わったといった様子があれば、「シニアだから」と決めつけず獣医師に伝えてみましょう。

・ミニチュアダックスフンド

①背骨：椎間板ヘルニアなど、椎間板疾患のリスクが非常に高い犬種です。ただし、高齢犬になってから起きやすい疾患というわけではありません。

歯：歯周病に注意が必要です。また、歯周病が進行することで口と鼻がつながってしまう「口腔鼻腔瘻」も比較的多い犬種です。

②背骨：抱き上げたときに痛がる・鳴く、背中を丸める、動きたがらない、階段や段差を嫌がる、歩き方がおかしい、後ろ足がふらつく・力が入りにくそう、といった変化には注意します。

歯：口臭が強くなった、歯ぐきから出血する、硬いものを食べにくそうにする、片側だけで噛むといった変化に注意します。

さらにダックスでは、歯周病に関連して口と鼻の間に問題が生じることがあるため、くしゃみや鼻水など鼻の症状も、口の中の病気と関係している可能性があります。

③背骨：まず重要なのが適正体重を保つことです。研究では肥満・過体重と椎間板疾患リスクとの関連が報告されています。滑りやすい床もマットなどで歩きやすくしてあげるとよいでしょう。

ただ、よく言われる「ダックスは階段禁止」「ソファから絶対ジャンプさせない」といった方法については、椎間板疾患の予防になるとは科学的には断言できません。無理な動作を避けつつ、過度に運動を制限せず、体調に合わせて適度な運動を続けるのが良いと思われます。

歯：日頃から口臭、歯ぐき、歯の状態を確認し、できる範囲で歯磨きなどのデンタルケアを続けます。

④健康診断では、背中や歩き方の変化、歯・歯ぐきの状態について相談してみてもよいでしょう。

特に「歩きたがらなくなった」「段差を嫌がるようになった」という変化を単純な老化と考えることが大切です。

また、急に立てない、後ろ足を引きずる、強い痛みがあるなどの急激な変化は、次回の健康診断を待たずに動物病院へ相談した方がよい症状です。

・柴犬

① 目：緑内障のリスクが高い

消化器：慢性腸症に注意

②目：片方の目を細める、目が赤い、涙が増える、黒目が白っぽく・青っぽく見える、目を気にしてこする、急に物にぶつかる、といった変化には注意します。

消化器：下痢や軟便が続く、吐くことが増えた、食欲が落ちた、少しずつ痩せてきた、といった変化に注意します。

③目：左右の目の見たり行動の変化を見ておき、異常に早く気づくことが大切です。

消化器：普段の便の状態、食欲、体重を把握しておき、「いつもと違う状態」が続いていないか確認しておきましょう。

④柴犬は緑内障の犬種素因があるため、シニア期の健康診断などの機会に、目の状態や眼圧について相談してみてもよいでしょう。

下痢・嘔吐・食欲低下・体重減少が続く場合は、「高齢だから」と決めつけず、慢性腸症を含めた消化器疾患について相談しましょう。

・ミニチュアシュナウザー

①脂質：高脂血症、特に高トリグリセリド血症になりやすい犬種です。さらに加齢に伴って、高脂血症が強くなる傾向があります。

尿路：尿路結石のリスクが高い

②脂質：高脂血症自体は症状がないこともあります。食欲が落ちる、吐く、元気がない、お腹を痛がるといった変化は膵炎などでもみられるため注意します。

尿路：何度もトイレに行く、少量ずつしか尿が出ない、排尿時に痛そうにする、血尿が出る、といった変化に注意します。

特に尿を出そうとしているのにほとんど出ない・まったく出ない場合は、尿道閉塞の可能性があるので早急な受診が必要です。

③脂質：適正体重を保ち、脂肪分の多い食べ物を過度に与えないようにしましょう。

尿路：いつでも水を飲める環境を整え、普段の飲水量や尿の回数・状態を見ておきましょう。

④シニア期の健康診断では、血液中の中性脂肪（トリグリセリド）やコレステロールについて相談してみてもよいでしょう。

また、尿路結石になりやすい犬種なので、尿の変化がある場合や過去に結石になったことがある場合には、尿検査や画像検査などが必要か獣医師に相談してみましょう。

・ コーギー

①神経・後ろ足：変性性脊髄症のリスクが高い犬種です。多くは8歳以降に発症する、進行性の神経疾患です。

②神経・後ろ足：後ろ足がふらつく、足先を引きずる、爪の減り方がおかしい、後ろ足が交差する、立ち上がりにくくなる、といった変化に注意します。

変性性脊髄症は一般的にゆっくり進行し、初期には強い痛みを伴わないのが特徴です。

③神経・後ろ足：滑りやすい床にはマットを敷くなど、歩きやすい生活環境を整えます。後ろ足の状態に合わせて、無理のない範囲で運動を続けましょう。

④後ろ足のふらつきや歩き方の変化が出てきたら、変性性脊髄症だけでなく、椎間板疾患や関節疾患など他の原因も含めて相談しましょう。

・ フレンチブルドッグ／パグ

①呼吸器：鼻や喉の構造上、空気の通り道が狭く、呼吸に負担がかかりやすい犬種です（短頭種気道症候群）。高齢期に発症しやすくなる病気ではありませんが、年齢にかかわらず注意が必要です。

目：角膜潰瘍など、目の表面のトラブルが起こりやすい犬種です。特にパグは、加齢とともに角膜疾患のリスクが高くなります。

②呼吸器：呼吸音が以前より大きくなった、少しの運動で息が上がる、暑さに弱くなった、寝ているときの呼吸が苦しそう、といった変化に注意します。

目：目を細める、涙が増える、目をこする、充血する、黒目が白っぽく濁る、といった変化に注意します。

③呼吸器：適正体重を保ち、暑い時間帯の激しい運動を避けるなど、呼吸や体温に負担をかけないようにしましょう。

目：日頃から左右の目の状態を見て、充血や濁り、涙の量などの変化に早く気づけるようにしましょう。

④以前より呼吸音が大きくなった、運動すると息が上がりやすくなったなどの変化があれば、呼吸の状態について相談しましょう。

目についても、充血や濁り、涙の増加などの変化があれば早めに相談しましょう。特にパグでは高齢期に角膜疾患のリスクが高くなります。

・キャバリア

①心臓：心臓の弁の疾患のリスクが高い。加齢との関連性も指摘されている。

神経：脊髄空洞症が多い犬種です。高齢期で増えますが、症状が出ない場合もあります。

②心臓：散歩で疲れやすくなった、運動を嫌がる、咳が出る、呼吸が速い・苦しそう、といった変化には注意します。特にシニア期では「年を取って体力が落ちただけ」と考えず、変化を見ておくことが重要です。

神経：首や頭の周辺を触られるのを嫌がる、突然痛がる、首や肩のあたりをしきりに搔くような仕草をする、歩き方がおかしい、といった変化に注意します。

③心臓：散歩中の疲れ方や咳、呼吸の様子など、普段の状態を知っておくことが大切です。暑さや過度な運動を避け、その日の体調に合わせて運動量を調整します。

神経：痛みや歩き方の変化がないか普段から観察し、症状がある場合は無理な運動をさせず獣医師に相談します。

④キャバリアは心臓病への犬種素因が非常に強いため、シニア期の健康診断では心雑音や心臓の状態について確認してもらおうとよいでしょう。必要に応じて心エコーなどの検査について相談します。

首や頭の痛み、特徴的な掻く仕草、歩き方の異常などがみられた場合には、脊髄空洞症を含めた神経疾患について相談しましょう。

・ ゴールデン・レトリバー／ラブラドル

①関節：ゴールデン・レトリバー、ラブラドルともに変形性関節症のリスクが高く、加齢とともに変形性関節症のリスクが高くなるため、シニア期には特に注意が必要です。

腫瘍：特にゴールデン・レトリバーは、がんのリスクが高い犬種です。血管肉腫やリンパ腫などが多いことが報告されています。

②関節：立ち上がるのに時間がかかる、歩き始めがぎこちない、散歩を嫌がる、階段や段差を避ける、足をかばう、といった変化に注意しましょう。

腫瘍：体にしこりができた、食欲が落ちた、体重が減ってきた、元気がなくなったなど、いつもと違う変化が続く場合には注意しましょう。

③関節：適正体重を保ち、体調に合わせて適度な運動を続けましょう。滑りやすい床にはマットを敷くなど、関節に負担をかけにくい生活環境を整えます。

腫瘍：日頃から体を触ってしこりがないか確認し、食欲・体重・元気など普段の状態を把握しておきましょう。

④歩き方や立ち上がり方に変化が出てきたら、変形性関節症などについて相談しましょう。

特にゴールデン・レトリバーでは腫瘍の犬種素因があるため、シニア期の健康診断では、年齢や状態に応じてどのような確認をしていくか獣医師に相談してみてもよいでしょう。

猫

・スコティッシュフォールド

① 骨・関節：スコティッシュフォールドは、遺伝的に骨や軟骨に異常が起こることがあります。シニア期特有の問題ではありませんが、年齢のせいと思って動きの変化を見過ごさないようにします。

②ジャンプをしなくなった、段差をためらう、歩き方がぎこちない、動く時間が減った、しっぽや足を触られるのを嫌がる、といった変化に注意します。

③高い場所にはステップを用意する、出入りしやすいトイレにするなど、ジャンプや段差の負担を減らします。適正な体重を保つことも大切です。

④歩き方やジャンプ、しっぽの動きなどに変化があれば、骨や関節に痛みや変形がないか相談してみましょう。

・メインクーン

①心臓：肥大型心筋症の遺伝的なリスクが知られている猫種です。若いうちに異常がなくても後から発症することがあるため、シニア期にも注意します。

股関節：股関節形成不全が比較的多いことが報告されています。シニア期特有の病気ではありませんが、年齢を重ねて動き方が変わっていないか注意します。

②心臓：呼吸が速くなった、呼吸が苦しそう、以前より動かなくなった、といった変化に注意します。

股関節：高い場所へジャンプしなくなった、段差をためらう、後ろ足の動きがおかしい、毛づくろいする範囲が狭くなった、といった変化に注意します。

③心臓： 普段から寝ているときの呼吸の様子を見ておくと、変化に気づきやすくなります。

股関節： 高い場所にはステップを用意し、トイレなども出入りしやすくします。関節への負担を増やさないよう、適正な体重を保つことも大切です。

④心臓： メインクーンでは HCM の遺伝的素因が知られているため、健康診断の際に心臓について相談してみてもよいでしょう。必要に応じて心エコー検査などで確認します。

股関節： ジャンプや歩き方などに変化があれば、股関節を含めて痛みや動かしにくさがないか相談してみましょう。

・ラグドール

①心臓：肥大型心筋症の遺伝的なリスクが知られている猫種です。シニア期特有の病気ではありませんが、年齢を重ねてからも注意します。

②呼吸が速くなった、呼吸が苦しそう、以前より動かなくなった、といった変化に注意します。口を開けて呼吸する、明らかに呼吸が苦しそうな場合は緊急性があります。

③普段から寝ているときの呼吸の様子や活動量を見ておくと、変化に気づきやすくなります。

④肥大型心筋症の遺伝的素因が知られているため、健康診断の際に心臓について相談してみてもよいでしょう。必要に応じて心エコー検査などで確認します。

・ ペルシャ／エキゾチックショートヘア

①腎臓：遺伝性の多発性嚢胞腎が知られています。腎臓にできた嚢胞が徐々に大きくなり、年齢を重ねて腎機能が低下することがあります。

②水を飲む量や尿の量が増えた、食欲が落ちた、体重が減ってきた、吐くことが増えた、元気がなくなった、といった変化に注意します。

特に猫は体重減少が分かりにくいので、見た目だけでなく定期的に体重を測るのも有効です。

③いつでも水を飲めるようにし、水飲み場を複数用意するなど水分をとりやすい環境を整えます。食事量、飲水量、排尿の変化とともに、体重の変化も普段から確認しておきます。

④多発性嚢胞腎が知られているため、健康診断の際に腎臓について相談してみてもよいでしょう。血液検査や尿検査のほか、必要に応じて超音波検査などで腎臓の状態を確認します。

・シヤム

①消化器：腸管の腫瘍が比較的多いことが報告されています。特に年齢を重ねた猫では、食欲や体重、排便などの変化に注意します。

②食欲が落ちた、体重が減ってきた、吐くことが増えた、下痢や便秘が続く、便に血が混じる、といった変化に注意します。

③食事量や排便の様子を普段から確認し、定期的に体重を測っておくと変化に気づきやすくなります。

④食欲低下や体重減少、嘔吐・下痢などが続く場合は、年齢のせいと考えず相談しましょう。症状によっては超音波検査などで消化管の状態を確認することがあります。

・シニア猫全般で見逃しやすい変化

猫は体調不良や痛みを表に出しにくいいため、**普段の行動の変化をよく見てあげましょう。**

特に押さえておきたいのは、次の5つです。

体重・食事：食べているように見えても、徐々に痩せていることがあります。体重減少は、慢性腎臓病や甲状腺機能亢進症、糖尿病、腫瘍など、さまざまな病気に気づくきっかけになります。

水・トイレ：水を飲む量や尿量が増えた、トイレの回数が変わった、便の状態が変わった、といった変化に注意します。腎臓病や甲状腺疾患、糖尿病などを発見する手がかりになります。

動き：ジャンプをしなくなった、高い場所から降りるのをためらう、階段を使わなくなった、といった変化に注意します。猫は関節に痛みがあっても、鳴いたり足を引きずったりするとは限りません。

毛づくろい・見た目：毛づくろいが減った、毛並みが悪くなった、特定の場所ばかり舐める、といった変化も、痛みや体調不良のサインであることがあります。

行動・生活場所：寝ている時間が増えた、遊ばなくなった、人を避けるようになった、今まで寝ていた場所へ行かなくなった、触られるのを嫌がるようになった、といった変化を、単純に「歳をとったから」と片づけないことも大切です。

おわりに

本書に記載した内容は、地域や施設によって異なる場合があります。

また、制度やサービスは予告なく変更されることがあります。

すべてを準備する必要はありません。

できる範囲で、気付いたときに確認していくことが大切です。

筆者について

本書は、皆さんがペットと安心して暮らすために、必要なときに迷わず確認できる資料として作成しました。

ペットを飼う方が増えている中で、まだまだ情報が足りていないと感じています。そんな中、これからもできる限り情報を発信できたらと考えています。

施設情報などについての情報は、筆者が運営するウェブサイトで発信しておりますので、よろしければそちらもご確認ください。

高齢ペット用サイト

「うちの子と、これからも」

<https://petanshin.com/>



© (株)AKI Works 2026

本ガイドの内容の無断転載・複製・再配布・販売を禁じます。

